

ふるさと大使 かわら版

2018年春季号（通巻87号）

<当会のホームページ>

<https://www.furusatotaishi.com>

■ 本会のシンボルマークは、大使同士の情報交換及び、その委嘱者との相互交流を主眼に図案化。4つのモチーフからなり、山（緑色／地方・故郷・自然）と矩形（青色／都会・テクノロジー）と円及び輪（黄、橙／人・情報・ネットワーク）を表現。

HEAD LINE

- 【1面】2018年度総会で会則改訂など承認
・地方再生に求められるもの
- 【2面】大使だより 第76回
さけがわ観光大使
 鮭川村長 元木 洋介
 さけがわ観光大使 新田 隆範
- 【3面】2017年度収支報告及び2018年度予算
・2017年度活動報告
・新理事就任のご挨拶 —伊藤美智子
・花の下法楽連歌 —山口 義夫
- 【4面】新年会員交流会、華やかに開催
 —三谷 啓子
・日本の箸文化について —鈴木 克也
- 【5面】北前船は動く総合商社
 —鴨川 キヨ
・アンテナショップを訪ねて「ここ滋賀」
 —鈴木 克也
- 【6面】震災7年目に想う —伊藤 彰
- 【7面】都内アンテナショップの改装相次ぐ
・植樹で得たシンガポールとのご縁
 —まほろば薫
- 【8面】函館真昆布のPR応援隊
 —葉袋 泰
・北九州市応援団の集い —利重 盛久
・岐阜県が「東京ぎふの味めぐり」マップ発行
- 【9面】故郷の中学生が修学旅行で研修訪問
 —伊藤 彰
・明治維新の魁「梅田雲浜」 —山下 晋彦
- 【10面】「なみへい」3月で閉店、第2ステージへ
・横内正さんの公演に感激
 —千波 裕美
・神田明神観桜会に参加 —千波 裕美
・新会員のひと言 —桜井 けい
- 【11面】新会員のひと言
 —小林英夫、根本二郎
- 【12面】夏季会員交流会のご案内
・お知らせ
・歓迎 新しい会員のご紹介
・全国ふるさと大使連絡会議の概要、編集後記他

2018年度総会で 会則改訂など承認

2018年度の総会が4月14日（土）、東京・京橋で開かれ、2017年度収支報告及び2018年度予算のほか、会則改訂などがほぼ原案通り承認された。

17年度は事務所の移転関連の費用が発生したが、全国大会及び新春と夏季の会員交流会の参加費を1000円引き上げたことなどが寄与して収支が改善され、全体として黒字となり、次期繰越金を積み増すことができた。

18年度はこの基調を維持するが、少額ながら事務所費を新たに計上した。

また、役員の補充人事として事務局の世話をさせていただいている伊藤美智子氏（ムゲンシステム(株)専務）を新理事に選任した。

今回の大きな案件となった会則改訂については、昨年末から会則改訂検討委員会（座長・平谷英明常任理事）で検討した案を元に審議した。最大の眼目は、「参与会員（年会費5000円以上）に限られている総会参加資格を会員全員に広げよう」というもので、この点を軸に、①全体を簡素化する②実態に合わせる③法令用語の観点から表現を正確にする——の3点を基本方針として検討した。この結果、主な改正点として①参与会員をなくし、総会参加資格を個人会員全員に付与する②常任理事会を削除し、常任理事は代表が指名し、代表が指定した業務を行う③個人会員のうち年会費5000円以上を納付する者を特別会員とし、理事会で意見を述べることができる——ようにした。（関連記事は3面に）

地方再生に求められるもの

総務省が1月末に発表した2017年の人口移動報告によると、東京圏（東京、神奈川、千葉、埼玉）と愛知、大阪、福岡の7都府県以外はすべて転出超過となり、地方から大都市圏への人口流出が続いている。東京圏は約12万人の転入超過で、2009年以降最大となった。少子高齢化と人口減少は全国的な構造だが、その中でなお地方から大都市への集中が進んでいるわけだ。政府は15年から「地方創生」を掲げ、東京一極集中の是正と地方の再生に取り組むとしているが、現実逆の結果が出ているようだ。

なぜ、そうなるのだろうか。地方に魅力がないわけではない。若者の地方移住の例が増加する一方、テレビでは地方の自然や観光、特産品などの紹介番組が花盛りだ。特定非営利活動法人「ふるさと回帰支援センター」によると、移住を希望する相談件数は17年に3万3000件を超え、過去最高を記録した。この10年で10倍以上に増えている。

にもかかわらず、地方からの流出が止まらない最大の要因は就労の場が少ないからだろう。「地方創生」と言いながら、東京一極集中の産業構造は変わらず、東京オリンピックを旗印に東京圏の公共事業は一段と加速している。自治体に総合戦略を作らせて政府が審査し交付金を出す仕組みも、旧来の手法そのものだ。「地方創生」と入れ替わりに「地方分権」が消え失せてしまった。

元復興庁次官で現内閣官房参与の岡本全勝氏は先ごろ日本経済新聞のコラム「あすへの話題」で、中央政府が海外の先進事例に沿って全国の自治体に指示する手法は前世紀に役割を終えたと指摘している。

政府が地域活性化の優良事例に挙げる各地の取り組みは、いずれも国の指示に頼らず、逆境の中で苦闘した成果ばかりである。地方には魅力も宝もある。地域で人とカネが循環するためにも、政府には分権を推進してほしいし、地方は誇りを持って自らの知恵と努力を発揮し、宝を磨いてほしい。

◆大使だより◆ 第76回 さけがわ観光大使

「人と自然と文化が輝くむら 鮭川」

鮭川村長 元木 洋介

鮭川村は、山形県北部に位置し、奥羽山脈の支脈と出羽丘陵に囲まれ、村の中央部を南北に鮭川が貫流する山紫水明な農山村であります。昭和29年12月に鮭川村、豊里村、豊田村が合併した新鮭川村が誕生してから64年を迎え、村民のたゆまざる努力によって着実な進展を遂げてきました。



鮭川村の基幹産業は一次産業である農業で、米をはじめ菌茸、花卉等の栽培が盛んであり、米は食味コンテストで日本一を受賞し、菌茸は山形県の6割を生産しています。また、転作作物として、キュウリ、アスパラ、ネギの栽培により、一定の成果を収めており、食用ほおずきは山形県知事より「燈玉」と命名されるなど、今後も更なる農業振興策を推進してまいります。

また、鮭川村では充実した子育て支援を推進しており、平成29年度から村内小中学校の給食を完全無償化しました。また、第3子以降の保育料の無料化、出産祝い金、入学祝い金なども充実させ、さらには平成30年度からは高校卒業までの医療費を無料化するなど制度の拡充を図り、安心して子育てができる環境づくりを推進しております。

鮭川村の観光スポットは、曲川小杉地区にある「小杉の大杉」が有名なアニメ「となりのトトロ」のトトロに似ていると、全国からたくさんのお客さんに訪れていただいております。

また、良質な温泉で美人の湯ともいわれている「羽根沢温泉」や滞在型の森林公園「鮭川村エコパーク」などの宿泊施設があり、イベントとしては仏式では東北一の「庭月観音灯ろう流し」、10月に行われる「鮭川きのこ王国まつり」「まるごとさけがわ鮭まつり」など魅力がいっぱいです。

さけがわ観光大使は、平成27年に鮭川村の観光をより多くの方々へ情報・魅力を発信していただき、あわせて観光等についてのアドバイスをいただきながら観光立村を目的として設置しました。現在鮭川村では芸能人、シェフ、会社役員など4名を委嘱して、様々な分野から鮭川村を全国にPRしていただいております。

豊富な自然の観光資源や地域資源を最大限に活かして良好な移住・定住環境を形成し、新たな産業の創出を推進するとともに、活気あふれるむらづくりを、大使の皆さんの応援をいただきながら、今後ますます鮭川村の魅力発信に努めてまいりたいと思います。

苦しい時に勇気をくれる「ふるさと」

さけがわ観光大使 新田 隆範

山形県最上郡鮭川村大字石名坂出身で、現在、東京で全国6支店、総勢700名の不動産会社を経営しております。鮭川村出身で、東京で活躍していることから、村長より「さけがわ観光大使」の指名を受けた次第です。



私は鮭川村で生まれ、小学校、中学校の幼少・青春時代をこの郷里で過ごしました。村は秋田の県境に近い、野山・川が多い豪雪地帯でありながら、夏には日本一の暑さを記録した地域で、農業と林業が主な産業となっております。

本地域は今で言う寒村なため、小学校時代の学年人数は24名、中学校時代の学年人数も108名と少なく、全員家族的な付き合いでした。中学は山奥から通っている者も多く、冬には除雪体制も無く、雪が多いため、通学できなく、寮に入って集団生活しておりました。

中学の卒業生には集団就職した同級生も多く、今なお連絡もつかない人もいます。

決して裕福でない村なので、生徒会活動費捻出のため、春は「わらび取り」4kg以上、秋には「イナゴ取り」2kg以上。またその間には、学校林の間伐伐採、学校田の田植え、稲刈りと、授業休校で行ってきました。当然、学校にはプールが無く、川で泳ぎを覚え、魚取りに一日中熱中しておりました。今ではいい思い出ばかりです。

一方、村内には仕事が少ないため、特に冬には東京への出稼ぎが多く、寂しさを紛らすため子供たちが参加する行事、夏の「綱引き」、冬の「どんどん焼き」は圧巻で、村の多くの老若男女が参加、まるで全員が子供のように無邪気に遊びました。

このような地域、風土のため、小さい時から自然に学ぶことが多く、また親はいつも農作業で忙しく、子供たちだけで遊ぶことが多いため、その時、協調性とリーダーシップを植え付けられました。

このような環境に育った私は、今、実業家として東京で頑張っておりますが、経営者には常に困難がつきものです。その時「ふるさと」は必ず勇気を与えてくれました。当時の仲間は50年を経た今でも連絡があり、その時を懐かしむことが多くなりました。

64歳となった今、私の「ふるさと」に少しでも恩返し出来ないかと思い、微力ながら東京にて鮭川村の魅力を発信しております。

「さけがわ観光大使」のデータ

- ◆制度発足：平成27年11月9日
- ◆大使の人数：4名（平成30年4月現在）
- ◆大使の活動：①人的ネットワークを活用した、本村観光の魅力の情報

発信②本村の観光に係る提言等。

- ◆大使に提供しているもの：名刺、観光情報に関する情報（観光パンフ等）、特産物

◆制度の所管連絡先：むらづくり推進課 Tel：0233-55-2111（代表）

2017年度収支報告及び2018年度予算

2017年度収支報告及び2018年度予算について下記の通り報告します。

■2017年度収支報告 (単位：円)

収入の部		支出の部	
前期繰越金	67,360	かわら版制作費	372,600
年会費	646,000	通信費	105,328
16年度分	(35,000)	事務費	19,536
17年度分	(560,000)	会議会場費	1,500
18年度分	(51,000)	全国大会開催費	696,736
全国大会会費	696,500	夏季交流会開催費	339,260
夏季交流会会費	429,000	新年交流会開催費	278,640
新年交流会会費	282,000	輸送・修理代	65,880
寄付等	4,000	振込手数料	3,456
		雑費	3,745
		(経費支出小計)	1,886,681
		次期繰越金	238,179
収入の部合計	2,124,860	支出の部合計	2,124,860

■2018年度予算 (単位：円)

収入の部		支出の部	
前期繰越金	238,179	かわら版制作費	400,000
年会費収入	600,000	通信費	110,000
		事務所費	60,000
		事務費	30,000
		会議会場費	10,000
全国大会会費収入	750,000	全国大会費用	750,000
会員交流会会費収入	650,000	会員交流会費用	650,000
その他収入		その他	20,000
		(経費支出小計)	2,030,000
		次期繰越金	208,179
収入の部合計	2,238,179	支出の部合計	2,238,179

2017年度の収支報告の内容を帳簿並びに証憑書類と照合精査し、妥当かつ正当なることを認めます。

2018年4月14日 監事 古川文久

2017年度活動報告

(2017年4月～2018年3月)

1. 総会の開催

4月18日(火) 銀座ビジネスセンターにて

2. 「ふるさと大使全国大会2017」の開催

10月20日(金) / (ホテル ラングウッド)

シンポジウム「～未来を拓く元気自治体、元気のヒミツ～」

◇記念講演＝高知県知事・尾崎正直氏◇

パネル討論＝丸山至・酒田市長、牧野百男・鯖江市長、泉房穂・明石市長、小谷みどり・身延山大学客員教授

3. 「会員交流会」の開催

7月28日(火) 夏季会員交流会/KKRホテル東京(大手町)

18年1月26日(金) 新年会員交流会/KKRホテル東京(大手町)

4. 「情報交流・研究会」の開催

7月8日(土) 「ふるさとのエコ活動」 鈴木克也氏

9月7日(土) 「ふるさとのエコ活動」 鈴木克也氏

12月9日(土) 「ふるさとのエコ活動」

鈴木克也氏・伊藤美智子氏

18年1月13日(土) 「環境問題と地域活性化」 鈴木克也氏

18年2月10日(土) 「環境ビジネスの課題」 伊藤彰氏

5. 「ふるさとデー・広島集い」開催

12月9日(土) (広島県アンテナショップ「TAU」)

6. その他

・常任理事会・理事会・世話人会を原則として毎月第2土曜日(中央区立環境情報センター)にて開催

・「かわら版」の発行

(5月1日、7月25日、10月20日、18年1月26日)

新理事 就任のご挨拶

理事 伊藤 美智子

(ムゲンシステム(株) 専務取締役)

私は栃木県小山市出身です。6年前に「ふるさとを愛する人」ということで当会会員になりました。歳を重ねるにつれ、ふるさとの良さ、ありがたさが身に染み



て理解できるようになってきたように思います。当会では交流会やかわら版を通して、自分がまだ知らない日本に出会うことができるのが、とても楽しみです。

今回、理事を受けるにあたり、微力ではありますが当会の活性化に貢献できるよう頑張りたいと思いますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。なお、昨年5月から弊社の会議室を当会事務局として提供しております。お近くにお越しの際は、どうぞ遠慮なくお立ち寄りください。

花の下法楽連歌

北九州市ひまわり大使 山口義夫

賦何風連歌 わたらせ座

発句	花さかり雪もまことのみ山かな	兼載
脇	筑波嶺わたるうらなる風	鑑
第三	のどけしなけふは霞とつどひきて	初瀬
四	深きゆかりに秋のさ筵	路光
五	高き名をしたひ詠みつぐ村里に	直人
六	遠方かけてきぬた打つ音	純一
七	宵の池いづくに月や浮かぶらむ	和雄
八	あくまですめるこれ秋の水	南天
	<むさしの連歌会>	

これは連歌師耕閑軒兼載翁の墓所のある古河の満福寺で大阪から帝塚山学院大学名誉教授鶴崎裕雄先生を招いて開催された追善連歌の初折表八句です。

連歌は数人が集い、宗匠の捌きで五七五、七七と句を連ねて一定のルールに基づき春夏秋冬及び雑(無季)を詠みます。むさしの連歌会では元武蔵野大学教授の南天宗匠のもとで毎月第二、第四の土曜日にJR三鷹駅前の武蔵野大学サテライト教室で開催。連歌は紙と筆記具で行う大和言葉の遊び。みなさま如何ですか。

新年会員交流会、華やかに開催

2018年1月26日、東京・大手町のKKRホテル東京にて約60名の参加をいただき、ふるさと大使新年会員交流会が開催されました。

浅田和幸代表の挨拶の後、今回の幹事を務めた山下晋彦さん（若狭おばま御食国大使）の紹介で（株）兵左衛門の文化事業部長、中道久次氏のミニ講演会を開催。「日本の箸文化について」と題して、これまで知っていたようで知らなかった箸のあれこれを興味深く聞かせていただきました。100年近い歴史を持つ箸メーカーの奥深い話に加え、50万円もする漆塗りの箸や、折れたパットをリサイクルした各球団のロゴ

マーク入りの若狭塗り「かつとばし！」の展示即売などもあり、大切な人の縁を繋ぐ「はし渡し」として会員交流会に大きな役割を果たしていただきました。

続いて山口義夫顧問による乾杯の発声で楽しい懇親会がスタート。いつものように初参加者自己紹介タイムがあり、一人ずつマイクを持って挨拶していただきました。山形のお米「つや姫」が当たるじゃんけん大会もあり、会場は大盛り上がり！



余興はプロ歌手の、池田さなえさん、上野さゆりさん、尾野玲子さん、千波裕美さんの歌で華やかに彩られました。

会場入り口には事務局の伊藤美智子さんの計らいで、カルビーが発売している「ご当地ポテトチップス」がディスプレイされ、それぞれの味も楽しめました。

鴨川キヨ副代表の中締めで、熱気あふれる交流会はひとまず終了。新年を祝いつつ、ふるさとを元気にしたいという思いが集まり、充実した交流となりました。

今後とも多くの会員の皆さんの参加と、新しい方への声掛けをしていただきますよう、更なるご支援の程、よろしくお願いいたします。

（理事 三谷 啓子）

講話『日本の箸文化について』

株式会社兵左衛門

ブランド文化事業部 中道久次氏

今回の新年交流会では、ミニ講演として福井県に本社のある株式会社兵左衛門の中道久次氏による「日本の箸文化」についての講話があった。その要旨を簡単にまとめさせていただく。

中国、韓国、モンゴル、東南アジア諸国などの米食の国は箸を使っているが、先が細くなった箸を使って、食事の最初から最後まで箸だけで食べているのは日本だけである。また、その使い方や作法も日本独自のものである。

箸は弥生時代後期に大陸から伝来したが、日本では大和ことばで「はし」と呼ばれるようになった。物の始まりを意味する「は」と、物の終わりを意味する「し」が合成されたものである。これには「人の向こうにある命ある食物と自分の命ある口をつなげる」という深い意味

・お箸の機能
はさむ つまむ はさぶ きる
さく ほくす はかす くるむ
まぜる すくう おさえる
のせる ⇒ お箸は指先の延長

①美しい食べ方が出来ない
②正しい箸で食事が出ない
③ルールやマナーを守った食べ方が出来ない
④周りが嫌われる

が含まれている。

卑弥呼は手食だったともいわれているが、その頃から徐々に広がり、飛鳥時代の聖徳太子が朝廷で箸を使うことにした。平安時代には貴族の間で、鎌倉時代には武士から庶民の間に広がったものである。鎌倉時代には和食の原点ともいえる「お膳」の中で、一汁三菜とともに箸が添えられ、箸の使い方も固まっていた。

今では食の西洋化の中で箸文化が薄れつつあるが、今一度、箸を見直すことによって日本人の心や日本文化の奥深さを考えるきっかけとしていただきたい。

箸は単に物を「挟む」だけではなく「つまむ」「ほくす」「切る」「くるむ」「おさえる」等多くの機能を持っており、そのために先が細くなっている。まさに指先の延長である。したがって、3つの指で三角形の形にして箸を持つことにより、器用に多くの機能が果たせるとともに、箸の先で食物の触覚を持つことができる。

箸を正しく持ち、正しく使うことは「型や美を尊ぶ日本文化の原点」があり、そこには周りの人に対する気配りや思いやりの日本人の心が表れている。また、内面的には生き物である食物に感謝して「いただきます」と合掌し、作ってくれた多くの人に「ごちそうさま」といって感謝する食文化ともつながっているのである。

（文責：鈴木 克也）

北前船は動く総合商社

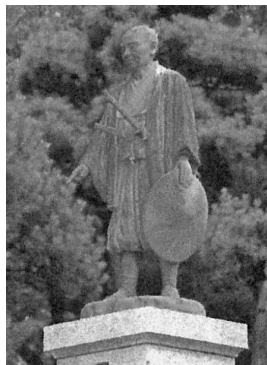
酒田ふるさと観光大使・鴨川 キヨ

酒田港は昨年、北海道から福井県の11の自治体とともに北前船寄港地・船主集落として日本遺産に認定されましたが、18道府県・182市町村に及ぶ北前船の寄港地を調べてみたくなりました。日本海が表日本だった時代でもあった頃の話です。

現在、日和山公園に河村瑞賢（1618～1699年）像があります。今年は河村瑞賢生誕400年にあたります。私はこの方がなぜ酒田に関係があるか、うすうす学生の頃に知っていましたが、深く調べてみたいと思っていました。

生誕は三重県南伊勢町だそうです。河村瑞賢の業績は海運航路の整備・築港・治水工事、新田開発、鉱山開発といった数々の公益事業に携わり、江戸時代の基礎を作ったプロジェクトリーダーでもありました。

1671～72年に整備された西廻り海運航路は出羽の米を江戸まで効率よく輸送するために開発された日本海ルートで、瑞賢をリーダーとしたプロジェクトでもあります。その要所にある酒田港は北前船交易によって湊町・商人のまちとして



上方などの文化も伝わっています。

西廻り航路の起点、越後から庄内への関門・鼠ヶ関（温海町）は古代の奥羽三関の一つであり、江戸時代も庄内藩の番所。入港船から税を徴収し始めたのは享保11年（1726）。加茂港（鶴岡市）の手前に三瀬という宿場があります。羽州浜街道の宿場町だったところでした。

出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）を開いた蜂子皇子が京から乗船し、たどり着いたのが鶴岡市だそうです。加茂は鶴岡城下の生活物資を陸揚げする港で、加茂から鶴岡までは馬で運ばれました。

五月雨や あつめて早し 最上川（芭蕉）

港町・酒田は日本海に注ぐ河口にあります。瑞賢が酒田を起点に西廻り航路を開き、下関経由で大阪そして最終目的地は江戸でした。北前船交易によって栄えたそんな港町・酒田に再び魅かれてほしいものです。



アンテナショップを訪ねて 「ここ滋賀」～ここからひろがる滋賀のストーリー

東京都中央区日本橋2-7-1 TEL:03-6281-9871

2017年10月29日、日本橋に滋賀の情報発信拠点「ここ滋賀」がオープンした。従来、有楽町にあったアンテナショップ「ゆめぷらざ滋賀」の機能を引き継ぎ、新たにマーケットや飲食機能を付加したものだが、コンセプトは全く異なっている。滋賀のヒト・コト・モノを体感してもらうため、狭小な店舗ながらも、日替わりで催事を開催するなど毎日何か新しいものに出会える店舗運営を心掛けている。施設は、1階がマーケットや観光案内、2階はレストラン、3階には無料のテラスを備えている。

「ここ滋賀」の運営を担当しているのは、UDS株式会社という企業で、店内デザイン等は、琵琶湖の自然をモチーフに、滋賀県産の材料も数多く使っている。コナラを使ったテーブルや椅子、信楽焼の大型カウンター、県産麻や綿を使った暖簾。ヨシを表現した天井デザインなど、滋賀の雰囲気に包まれるような空間デザ



（大竹 萌店長）

インを施している。

日本橋に「ここ滋賀」を構えたのは、日本橋が近江商人ゆかりの地であり、現在でも近江商人にゆかりのある高島屋、日本橋西川、柳屋ビルディング、丸紅など多くの企業が日本橋で経営を続けているのが理由。

来館者数は、開店2カ月の12月までに10万人を突破、4カ月目の2月には20万人を突破するなどの盛況である。滋賀ゆかりの方の来館も多く、故郷への想いが強い人が集う場所となっていることから、県内企業と連携したイベントも多く開催されている。

売れ筋商品としては、鮒ずし、赤こんにゃく、近江牛生ハム、日野菜漬け、日本酒等で、マーケットでは特色ある地域産品1000種類くらいが販売されている。信楽焼の陶器、麻・木綿・絹のハンカチやタオル、民画の葉書等、地域の文化を感じさせるものが多い。店頭には毎月発行される情報誌「滋賀の魅力ガイドブック『SHIGA's GUIDE』」が置かれているほか、動画映像が流れている。また、地域の日本酒の飲み比べが出来るカウンターもある。店は単なる商品販売の場ではなく、訪れた人々を滋賀へいざなうための情報発信基地として位置づけられているのである。

常任理事 鈴木 克也

震災7年目に想う

八幡平市ふるさと大使 伊藤 彰

平成23年3月11日弊社の釜石工場は東日本大震災の津波で屋根を残して殆ど流されました。工場の後ろが高台だったので、一帯の大平鉄工団地関係者は無事に避難ができて、人的被害は1人もありませんでした。私は14時46分に釜石駅にいて切符を買おうとした瞬間、突然経験したことの無い激しい揺れに襲われ、駅舎にいたおばあさんは地面にへたり、駐車場の車がボンボン飛跳ね、駅前の新日鉄工場の裏山や空全体に雷鳴が轟く3分間をととても長く感じました。

平成17年釜石に企業立地以来、何時か来ると思っていた三陸津波がいきなり来襲することを120%確信しました。駅周辺にいた人々が地震の被害状況やお互いの無事を確認しているうちに、1.2km先釜石湾側にもうもうと上がった茶色い煙を見た瞬間津波の第1波が襲来したことを感知しました。

茶色い煙が海辺一面に広がって、水嵩と速度を増した津波に追われて必死で走ってきたタクシーが津波の先端と一緒に駅前広場に飛び込んできた只ならぬ事態に、駅周辺の人々は駅員の誘導で鉄筋コンクリート5階建の市教育センターに避難しました。屋上に上がり、津波が釜石湾から甲子川を第2波、第3波、第4波と逆流する様子を見ているしかなく、夕暮れの市の中心部からぱっと火の手が上がり、避難者の不安が増幅しました。

古くも地震に強いことが確認された市教育センターが市の緊急災害対策本部となり、避難所生活を3日間経験することになりました。その日の夜は、お握り1個とペットボトルが各自支給され、渡された段ボールを床に敷いて寝ました。東北の3月は寒く、コンクリートから伝わる冷気に体が縮み、夜中にミシミシと強い余震が繰り返されたので、寝息を立てる人はいませんでした。家族揃って食事が出来ること、暖かい布団で足を延ばして寝られること、何よりも無事に生きていること自体、日常のごく当り前のことが、途轍もなく幸せなことを身に染みて思い知るのです。

翌朝黎明に起きて、災害対策本部の消防関係者が上司に市内状況を死者多数と報告する声を聴く中、釜石湾に面した工場の状況を確認するため、市街中心部の大町を通過して大平鉄工団地に向かいました。津波で残ったコンクリート建物を縫う道路は、津波の通り道となり一面瓦礫が折り重なり、ペしゃんこの車が頭を下にして電柱に張り付いていました。自宅を確認しに来た人々と次々す

れ違いました。被災を聞いて朝舞い戻ったと見える建設会社の社長の目がギラリと光っていました。

幹線道路は瓦礫で溢れていて先に進めないのが、三陸鉄道高架線路が唯一安全な経路となっていました。線路を工場方向に歩いていると隣の工場社長と出会いました。ずぶ濡れなので尋ねると、地震が来た時釜石湾をビデオ撮影して津波に呑み込まれ、裏山の木にしがみ付いて一夜を過ごしたとのことでした。3月12日朝三陸沿岸の空は青く、まるで街が絨毯爆撃を受けたかのように広がる地上の壊滅的な惨状を際立たせていました。

工場に辿り着くと、土台以外に事務所は跡形もなく、工場建屋の鉄骨と痛んだ屋根が残っていました。工場は、海水に洗われて散乱した金属製の廃棄物資源化装置類と大破した4トンドンプを残してほとんどが津波で海の底に持って行かれました。工場敷地奥の隣工場の境界地面に、工場入り口にあった特注の木製の看板が泰然と横たわり、流されずに残っていました。

地震が起きてから頭が真っ白で、この先の事を何も思いつかない状態でしたが、地元産材で作った思い入れのある木製の会社看板を確認して、恐ろしい津波第1波の引き波に流されずに工場の最奥でしぶとく横たわっている会社看板が私に再チャレンジを促しているように感じました。18年間廃棄物を仕事にして来た私がこの被災地で何が出来るか。街中の山となった災害廃棄物を片付けることで被災者の生活を守ること、まずそこから始めることをその時決意しました。

2日目は、朝食のパンとペットボトル飲料を頂いてから、釜石湾隣の唐丹湾地域の様子を確かめに三陸鉄道の石塚トンネルを歩きました。1km程あるトンネルは停電のため真っ暗でしたが、上り、下り双方向に人の列は絶えませんでした。その先にある唐丹町は市内でも桜並木で有名な所です。桜並木道の下海沿い一杯に広がっていた木造の住宅街は壊滅していました。

「三陸地方のリアス式海岸は湾口の幅が広く、湾の奥に行くに従って幅が狭く、水深も浅くなるため、津波が押し寄せると漁村や都市、港がある湾の奥に向かって波



のエネルギーが集中するという特徴があります。このため三陸海岸は、これまで幾多の津波被害を受けてきました。」（『岩手を襲った津波の歴史』）。

昭和8年の三陸沖地震津波の大きな被害を受けて、この下に住んではいけないと言う教訓のために植えられた桜並木でしたが、その教訓は生かされていませんでした。この日は終日崩壊した街の中を憑りつかれたように探索していました。

避難場所に戻り、夜のお握りを頂いているとNHKラジオのニュースで財務省は震災の復興資金を確保するために増税を検討すると流れていました。被災者を鞭打つ様に、このタイミングで災害が増税の口実に使われることに力を失いました。そうして自分の家族と会社に心配をかけているので鉄道回復を避難場所ですぐ待つのでなく、3日目朝長女に連絡を取って、徒歩で仙人峠を越えて遠野に出て、葛巻から東京に戻りました。

東日本大震災を体験して地震から津波まで30分あるので、健康であれば逃げる時間があることを確認して、決

して恐れる必要は無いと思いました。海の傍にある木造住宅は壊滅状態でしたが、10階建鉄筋コンクリートビルは健在だったので、嵩上げ工事に7年以上の歳月を掛けているよりも、いざと言う時に逃げられないお年寄りや病人、幼児の居住環境は、老人ホーム、病院、幼稚園等を海の傍でも安全で快適な耐震高層ビルの中に造れば、普段快適に暮らせて、いざと言う時は逃げる必要もなく、上から津波を見物していれば良いのではと言う思いが強くなっています。

工場が被災して以来は、別会社を興して釜石地域の災害廃棄物処理事業と復旧・復興土木工事そして福島県の除染作業も行い、被災者の生活再建と被災地域の社会基盤整備や被災地の再生に役立ちたいと事業を続けています。しかし、今被災地で行われている復旧・復興工事事業は人口減少や過疎化の災害前に戻ることによって留まっており、関東大震災時に東京府知事・後藤新平氏（岩手県奥州市出身）が進めた帝都復興計画のような100年後の全体ビジョンがないことが残念でなりません。

《都内アンテナショップの改装相次ぐ》

東京都心部の自治体アンテナショップのリニューアルが相次いでいる。

3億円以上をかけて全面改装し、連休に合わせて4月28日にオープンしたのが宮崎県の「新宿みやざき館KONNE」（写真）。1階には600点以上の物産品をそろえ、以前は2階にあった観光情報コーナーも移した。催事スペースも設け、各種イベントやテストマーケティングも行う。2階は木のぬくもりに包まれた本格和食レストラン「くわんね（食べて下さいの意）」を開設、地元食材を生かした料理を出す。

建物の内装に県産材をふんだんに使い、外装も宮崎杉の集成材をガラス面に配し、デザイン性と温かさを表現した。外壁に大型ビジョンを設置、通行人に対して宮崎の情報発信をする。

群馬県は銀座5丁目にあった「ぐんま総合情報センターぐんまちゃん家」を3月下旬に閉鎖、5月中旬、銀座7丁目



の「ギンザ シックス」のビルの1・2階に移転オープンする。旧店舗は情報発信を主体としていたが、新店舗では飲食店も新たに導入する。

茨城県も銀座1丁目の「茨城マルシェ」を全面改装するため3月末で休業、9月末に再オープンする。知名度向上などを狙った目的が一定程度果たされたことから、よりブランドイメージを高める高級路線も打ち出す方針で、2億8000万円を投入する。

また、島根県の「にほんばし島根館」が耐震工事を終えて2月に再オープンしたほか、銀座熊本館も3月下旬、改装オープンした。東京スカイツリー内にある栃木県の「とちまるショップ」は昨年12月にイートインコーナーを新設、ランチメニューやカフェメニューを出せるようにしている。東京駅・八重洲南口前にあった京都市の「京都館」はビルの建て替えのため3月中旬に閉店、2020年の東京オリンピック後に新たな施設を開設するという。

都内ではアンテナショップが増加する一方、郷土料理や地方特産の食材を使った飲食施設に力を入れる傾向が強まっている。



歌人 まほろば薫
(Round Table代表)

シンガポールとのお縁、出逢いは去年の9月にGarden by the bayのFlower Domeに山形の啓翁櫻を植えたことに始まります。在シンガポール日本大使館のお力添えでGarden by the Bayで開かれた大きな会議で想いをお伝えしたところ、

憧れのフラワードームに植えることになり、政府の植物の専門家を常時つけてくださることになりました。

世界各国からの観光客が多数訪れ、Flower Domeに啓翁櫻が花開く。想像しただけでも嬉しい限りです。

さらに去年12月、シンガポールに急増している小児癌撲滅チャリティコンサートに主催しているシンガポール子供オーケストラのリーダーの14歳の少年に招かれて、琴を弾き、和歌を詠みました。チェロとも共演しました。切符は完売し、全額寄付して帰ってきました。

櫻からご縁が広がりました！
素晴らしいことです。

月鏡 花のひとひら ひとしづく
水面ひろがる 風の紋様



日本大使館で参事官と

函館真昆布のPR応援隊として 参加して

はこだて観光大使 葉袋 泰（北海道道南会会長）

函館市南茅部の前浜で採れる「白口真昆布」は松前藩が朝廷や将軍家に献納していたことから「献上昆布」の別称があります。函館真昆布は、現在昆布の生産量は日本一ですが、採れる浜により白口真昆布・黒口真昆布・本場折浜真昆布と三つに分類されます。現在、全国的には北海道産の日高昆布や利尻昆布などの名前が知れ渡っていますが、函館市では昨年から道南産の昆布を「函館真昆布」と統一して全国的にPRして行く事としました。

折しも、日本テレビの人気番組でTOKIOが出演している「ザ!鉄腕!DASH!!」が「体にいい食材で一番ヌルヌルよく滑るのはどれか?」(仮)と題して、第1回ご当地ヌルヌルつるつる選手権が企画され、函館市では「函館真昆布」のPRを兼ね参加することになり、はこだて観光大使が多数所属する「ふるさと応援団 北海道道南会」に協力依頼がありました。

ロケ地は静岡県島の島田球場で、10月30日～31日の一泊二日の行程で行われ、函館真昆布応援隊として、北海道道南会よりはこだて観光大使でもある島田瑞子・三村寿雄両副会長ほか7名が参加し、函館市からは農林水産部・櫻井貴之課長も上京。現地にて合流し、函館真昆布のヌルヌル仕込み手伝いとして、昆布の端材を水に浸してよりヌルヌルする作業などを行う。

球場のホームベースからセンター方向に100mのコースを作り、コース上にヌルヌル食材を敷き詰めてTOKIOの城島茂君が体を張ってより遠くまで滑るヌルヌル食材は何かを競うというゲームでした。

食材は、北海道代表が「函館真昆布」、岩手県代表「三陸わかめ」、群馬県が「大和芋」、沖縄県「オキナワモズク」、宮古島「アロエベラ」が参加。競技結果は、「函館真昆布」57.5m、「大和芋」53.7m、「三陸わかめ」49.2m、「アロエベラ」46.3m、「オキナワモズク」39.1mと「函館真昆布」が見事に優勝。11月12日(日)に日本テレビで放映されました。なお、ヌルヌル食材に使用した昆布は、製品化される際に出る切れ端など廃棄処分されるものを使用しました。

道南会、函館市長を迎えて盛大に開催

北海道道南会では毎年2月の第1土曜日に総会・懇親会を開催しておりますが、今年は2月3日(土)に開催されました。来賓として、工藤壽樹函館市長、大泉潤観光部長、近藤晃司北海道東京事務所長、高橋照美北海道ふるさと会連合会会長、浅田和幸全国ふるさと大使連絡会議代表、大小林正孝関西函館をおもう会会長、佐藤金也東京北斗会会長、倉谷久東京かみのくに会会長、太田靖子東京福島会副会長、栗原史サッポロビール(株)法人営業部シニアマネージャー様をお迎えし、会員104名と楽しいひと時を過ごしました。



工藤市長からは北海道新幹線開業のその後や、少子高齢化に伴う人口減少問題と函館市の今後等々についてのお話があり、会場は函館弁も飛び交う中、ふるさとの話で盛り上がりしました。最後はたっぷりの景品が当たるお楽しみ抽選会で更なる盛り上がりを見せ、楽しい時間を過ごされ、函館ラーメン等のお土産を手に次回の再会を約束して散会されました。

市制55周年記念「北九州市応援団の集い」開催

第10回北九州市応援団の集いが2月7日(水)、東京・大手町の経団連会館で行われ、400名を超す参加者でにぎわった。

今回は北九州市誕生(昭和38年2月10日、旧5市合併で発足)の55周年の記念すべき大会であった。

北九州市の北橋健治市長のご挨拶と市政PRに続き、テレビでおなじみの東進ハイスクール予備校講師・林修氏による特別講演「いつやるか?今でしょ」が行われた。また市の特命大使3名の委嘱式と俳優の草刈正雄氏に市政55周年アン

バサダーを委嘱する式が行われた。

この後、国際会議場で懇親会が開かれ、PRのアトラクションを交えてにぎやかに歓談した。

お土産に「るるぶ情報誌 北九州市・文字レトロ」最新版と北九州市のPR記事が満載の「週刊文春」が参加者全員に配布された。

当会からは北九州市応援団でもある山口義夫顧問(北九州市ひまわり大使)、小西孝蔵(宇部ふるさと大使)、西山忠壬(しものせき海響大使)、本多忠夫(水戸大使)の各氏らが参加した。
北九州市ひまわり大使 利重 盛久



岐阜県が「東京ぎふの味めぐり」マップ発行

岐阜県東京事務所が都内にある同県ゆかりの店を紹介した食べ歩きマップ「東京ぎふの味めぐり」を3月発行した。

A3サイズのコート紙の両面にカラー印刷したものをハツ折にしたハンディタイプで、片面は都心の地図とゆかりの飲食店23店をメイン料理と店舗の写真付きで紹介。もう一面には岐阜県の主要温泉6湯と特産品などを紹介している。

これらの店舗は同県出身者やゆかりの人が経営したり、同県の郷土料理などを出しており、県人会や県関係者らの推薦する店を選んだという。

各地の郷土料理を探したい人は多いため、こうした取り組みが他の地域にも広がることを期待したい。

故郷の中学生が修学旅行で弊社を研修訪問

八幡平市ふるさと大使 伊藤 彰
(ムゲンシステム株式会社代表取締役)

八幡平市立松尾中学校では、生徒の主体的な学習態度を育てるため、修学旅行でグループ別研修を実施しています。これは、東京で事業をしている八幡平市出身者に実際に会って話を聞くことを通して、生徒がその生き方に触れ、体験を踏まえた学びの機会とすることが狙いです。また、首都「東京」と自分たちのふるさと「岩手・八幡平市」のつながりや良さを考え、「岩手・八幡平市」について改めて考える機会にしたいとの学校の考えがあります。

この企画は八幡平ふるさと会事務局長の高橋和一氏（ふるさと大使）が川崎市内の元小学校校長だった経歴で、松尾中学校から連絡が入り、今年の本修学旅行に取り上げられました。

その自主研修グループの1組である5人の生徒さんに4月20日（金）、弊社の事務所を訪問して頂きました。弊社を研修先として選んで頂いたことは光栄であり、大変有り難く思う次第です。普段は目の前の仕事に忙殺されるばかりで、自分の仕事を客観的に眺める機会は少ないので、改めて創業期の初心や今後の展望を確認して、事業意欲を鼓舞する大変良い機会となりました。



訪れた5人の生徒たちは、先生の引率もなく自分たちだけで会社に辿り着き、会社の事務所では、姿勢がよく、礼儀正しく、あらかじめ会社情報をホームページで調べ

て各自の質問項目を準備し、協力し合って順番に質問を頂いたのです。こちらの想いや説明もスムーズに伝えられた次第です。



訪問は午前10時～12時の2時間で、東京から見た八幡平市の良さ・魅力、東京と八幡平市の共通点や異なる点、岩手県や八幡平市を担う中学生に望むことなど、地元を見つめ直す視点からの質問が相次ぎました。これらの点については、同市には豊かな自然と温泉・スキーなどの楽しみや新鮮でおいしい食材がある。東京は情報や人・お金が集まり便利な半面、競争が激しく、人間関係が希薄。四季折々の自然に包まれ、家族仲良く、忍耐強く謙虚な青年に育ってほしいと答えました。

また、弊社の仕事については、廃棄物を資源として社会に循環させ、持続可能な社会づくりに役立ちたいと考えて平成5年に各種廃棄物の収集運搬事業を創業した経緯を説明。廃棄物を油化・ガス化する装置を釜石市で開発したり、微生物を使ったバイオマストイレの開発に取り組んでいることなどを話しました。

今回、研修先選ばれたのは私が同市のふるさと大使を務めていることが1つの理由でしょうが、故郷を離れた「ふるさと大使」の活用としても有意義な手法ではないかと、ありがたく思いました。

明治維新の魁

「梅田 雲浜（うめだ うんぴん）」

若狭おばま御食国大使 山下 晋彦

私の郷里、若狭小浜が生んだ偉人で、幕末の尊皇攘夷運動を先導したのが「梅田雲浜」です。

江戸後期の文化12年（1815）小浜藩士の次男として生まれ、15歳まで小浜で育ち、後に京都、翌年江戸で儒学者「山口管山」に師事し、当時の官学だった朱子学を極めました。しかしながら嘉永5年（1852）36歳の時、藩に対し度々藩政改革意見書を提出したが受け入れられず、藩籍を剥奪され浪人の身となりました。

安政元年（1854）ペリーが来航した折、江戸に行き、精力的に尊皇攘夷を志す水戸の「藤田東湖」、長州の「吉田松陰」等多くの同志と協議、奔走したのです。特に「吉田松陰」とは親交が深く「松下村塾」の額を依頼されるほどでした。また、長州藩の毛利家を訪ね、物産交易について意見具申し、長州藩の財政に寄与したと言われております。

安政5年（1858）安政の大獄が始まると「雲浜」は時の孝明天皇とも通じていると考えられ、大老・井伊直弼らの意見で真っ先に捕縛され、投獄されたのです。

「吉田松陰」らが救済に奔走しましたが叶わず、安政6年（1859）獄中で病死、小倉藩主小笠原家によって埋葬されました。享年45歳の生涯でした。

生前「雲浜」は「事ならずして倒るるとも、その志は長く世に伝わり、勤皇の魁と相成り候らへば、又、是男子の大幸ならずや」の言葉を残しております。

開国を迫った外国の圧力、社会の混乱による不安が国中に広がった幕末期に、尊皇攘夷を国の未来の為と信じ、封建社会を打ち破り、全ての人の平等な社会を作ろうとして立ち上がった先覚者と言えるでしょう。

維新の元勳「西郷隆盛」は「梅田雲浜の今に生きながらえていたならば、我々は執鞭の徒（馬丁口取り）に過ぎないであろう」と述べています。

没後8年が過ぎた慶応3年（1867）、天皇のもとに新政府の樹立、「明治」という新しい「日本国」建設への扉を開く魁となったのです。

「なみへい」3月で閉店、第2ステージへ

「東京から故郷おこし」をコンセプトにしたJR神田駅前の全国うまいもの交流サロン「なみへい」が3月末で従来の飲食店を閉店した。2008年7月のオープンから10年を期に、新たなステージに入るためだという。

同店は地方の農業・漁業の元気づくり役立ちたいとの思いから、各地の郷土料理や食材を活用した料理を提供することで、地方の経済に貢献するとともに、東京と地方の交流や同郷同士の交流を深め、地域づくりの出会いの場とすることなどを目的にしていた。

毎月、1カ所から数カ所の地域を選び、その地の食材を使ったコース料理などを提供してきた。その数は100カ所以上にのぼる。

同店のコンセプトは当会の目的とも共通することから、当

会も「ふるさとデー」や会員交流会の2次会、忘年会などでも利用してきた。当会会員でもあるオーナーの川野真理子さんは「飲食店としての仕事のウエイトが重くなり、地域活性化に手が回らなくなった。10年を期にもう一度本来の目的にチャレンジしたい」と話す。

今後、年間を通したイベントや地域に人を連れて行く事業などを手掛ける計画だ。詳細については次号で改めて本人に紹介していただくことにしたい。



横内正さんの公演に感激

去る4月4日、浅草公会堂で公演された「松井誠特別公演 子別れ傘 おやどりこどり」を私の応援団数名と観てきました。俳優で北九州市観光大使の横内正さんが出演され、松井誠さんは昨年、横内さんの忘年会でご紹介頂いていたからです。1部は人情時代劇、2部は豪華絢爛の唄と舞踊絵巻でした。松井さんの博多人形の女形舞踊ショーは華やかな舞いで、美しく艶やか。横内さんの「サントワマミー」はさすが素敵な歌声・歌心でした！

時代劇のお芝居はさすがさすが。横内さんは暴れん坊将軍の大岡越前や水戸黄門の格さん役で有名ですが、目明かしの重

蔵親分に扮した横内さんも素敵で、圧巻の演技に涙涙でした！

終演後、楽屋に御祝儀にお花代とお土産をお届けしました。やさしく親しいお心遣いに皆さん感激して大変盛り上がりました。横内さんには、歌手協会のステージで歌わせて欲しいと頼まれました。

ぜひ当会の交流会でも歌って頂きたいですね。

（ヨロンバナウル王国観光大使 千波 裕美）



★神田明神観桜会に参加★

ヨロンバナウル王国観光大使 千波 裕美

4月7日（土）夕、神田明神で開かれた恒例の観桜会に参加しました。ただ、今年は桜の開花が早かったため、肝心の桜が散ってしまい、境内での夜桜を取りやめて社務所の地下で執り行われました。会場の変更を知らずに帰られた方もおられたかも知れず、申し訳ないことでした。当会からの参加は本多忠夫副代表を含め数名でしたが、全体の参加者は80名程度。私達は神田明神の氏子代表で小城観光協会大使の江頭

清昌様御夫妻のテーブルにつき、楽しく盛り上がりました。

モンゴルの民族衣装、独特の喉笛のような発声法、広大な草原に響き渡るような歌唱法はモンゴルのイメージをよく表していました。また和太鼓は、大太鼓や締太鼓を叩いて地響きのような力強さ、心の底から沸き上がって来る力強さを感じました。迫力の和太鼓は日本の心ですね。佐渡の「鼓動」のステージや、石川さゆりさんの記念コンサート「昭和女子大学にて」を思い出しました。



◆新会員のひと言◆

全国の仕事先で酒田をPR

酒田北前大使 桜井 けい

はじめまして。こんにちは。この度、鴨川キヨ様から会員入会をおすすめ頂きました桜井けいと申します。皆様、どうぞ宜しくお願い致します。

私は、山形県酒田市で生まれ育ち、日本クラウンから今年でデビュー 18



年になりました演歌歌手です。3年前にふるさとから埼玉県に拠点を移し、新曲「夢をあずけて」で、各テレビ、ラジオ、ゲスト、歌謡ショー出演やキャンペーンで、全国展開で頑張っています。

先年の11月には、大変光栄な「酒田北前大使」の委嘱状を頂き、全国の仕事先で酒田市のピーアールを積極的にさせて頂いています。他都市とともに日本遺産認定になりました「北前船寄港地・船主集落」を抱える酒田市を、これからも誇りを持って愛し続けて参ります。皆様も是非、北前船で栄えた歴史と文化の町（酒田市）へお出かけ下さいませ。酒田舞妓も皆様をお待ちしていますよ。

庄内藩の旗本……

144年後の今、北海道がふるさと！

小樽ふれあい観光大使 小林 英夫

旗本だった先祖は、庄内藩で明治維新を迎えた。いれ帯刀禁止の時代が来ると読んでいた。幕末を迎えるころには、いち早く刀鍛冶へ目を向け修行に励んだという。だが、しかし時代の変遷とともに、逆行することへの苛立ちが刀鍛冶から鋸鍛冶へと転換した。人切り包丁から樹を切って人の為になろうと、明治7年に北前船で北海道を目指し、鋸鍛冶の初代として小樽に仕事場を構えた。以来、私の父親が4代目として日本の3本の指に入る鋸職人となった。



私は、生まれたときから職人の丁稚奉公のような環境で育ち、父親が他界したので私が5代目を襲名した。明治7年から144年間お世話になった小樽市に何かの恩返しをと私は考え、「町の活性化」や「文化芸術の普及活動」さらに社会奉仕団体の「ロータリークラブ」に入会して国際交流へと歩んできた。

小樽市は、ソビエト連邦時代から姉妹都市交流をしていた。私も1985年から日本とロシアのダンス国際交流に力を入れた。子供たちの相互交流を推進拡大したおかげで、ロシアから名誉市民権（1990年）と勲章（2000年）をいただいた。いまやアメリカ・中国・ベトナム・スリランカ・イタリア・ドイツ・カナダ・インド・ニュージーランド・韓国・台湾・メキシコ・キューバなどを訪問して歩いている。

先祖代々ふるさとを愛し、自分はふるさとのために何ができるのかを自問自答！ 答えは鋸職人に在った。話はこうである。大工職人が切れなくなった鋸の目立ての依頼を受ける。それを鋸職人は切れ味の良い目立てをする。大工さんは笑顔で良い仕事ができ見事な家が建つ、建築依頼主は喜ぶ、家族も喜ぶ、隣近所も景観が良くなり喜ぶ。このように喜びが波紋のように広がりを見せる。

ダンスを生業としてきた私は、1975年から試行錯誤しながらオリジナルなダンス学習法を創り出した。それは「ダンスうんどう」という造語を作り、今ではインターネット百科事典といわれる「ウィキペディア」で紹介されるまで認識されてきたことはうれしい限りである。

少子高齢化・核家族時代に突入した今、介護予防・認知予防に最適と、「イキイキ健康体操」として世の中に知られるようになった。また数年前に愛知県のプロ団体に「ダンスうんどう」講習をしたが、愛知県にある医療研究センターが同団体と10ヶ月間かけて数値化し、認知予防として発表され、「コグニサイズ」として介護師の方々が学んで現場で役に立っている。また特許庁に昨年「商標登録」出願して、登録がなかったことは喜びに値する。

“踊るアホウに、観るアホウ 同じアホウなら踊らにゃソンソン!!”。踊って健康寿命を延ばそうと、私はサーク

ル活動に指導者育成にと各地を訪問している。

2012年9月に小樽ふれあい観光大使に任命された。仕事柄、各地を訪問する機会が多いので、ふれあい観光大使として、都道府県の市・町・村長を表敬訪問して地方創生にもかかわりあっている。ふるさとを愛する心で北は北海道から南は沖縄まで全国各地を出歩いている昨今。皆様ともぜひ交流を深めたい。

美しい福島を取り戻したい

金山町観光大使 根本 二郎

これまで何度か、この会の全国大会や交流会に参加してきましたが、浅田代表のお誘いもあって入会させていただきました。



生まれは福島県石城郡川前村、現在のいわき市です。村は僻地だったため、叔父を頼り上京し、都立田園調布高校に入りました。中央大学法学部卒業後、衆議院議員・飛鳥田一雄の秘書を経て、34歳で新宿区議会議員になり、以後65歳まで7期務めました。途中で、中村敦夫参議院議員の秘書を務めたり、新宿で焼き鳥屋「結（ゆい）」を経営、多くの方との出会いの場を持ちました。その関係で新宿社交料理飲食業連合会長を務めています。

2011年3月11日の東日本大震災と原発爆発事故は、故郷の持つ大きさを気づかせてくれました。実家や太平洋側に住む友人たちの連絡が途絶えてしまい、安否がわかりませんでした。幸い津波は逃れたものの、放射能汚染が広がり、避難を余儀なくされた親戚、友人が多く出ました。

小さいころ遊びに行った海水浴場は、がれき以外に跡形もなくなり、福島市内のあづま総合体育館は、避難者であふれていました。私の所属するライオンズクラブは仙台の仲間たちに、緊急物資を送り続けました。

私は、福島に東北に、電気も食料も供給させ、東京で気楽に消費していたこと、そして被害を負わせてしまったことを強く反省しました。私にとって「ふるさとは福島」と、「絆」の大事さに改めて気がつきました。美しい福島を取り戻すために多くの皆さんと協力して、東京で福島を応援しようと思っています。

区議時代に福島県金山町と新宿区の交流を区に働きかけたご縁で金山町の観光大使を務めています。福島県会津若松市の会津若松駅から新潟県魚沼市の小出駅を結ぶJR只見線は車窓からの景観が美しく、「世界で最も美しい鉄道」として有名ですが、2011年7月の新潟豪雨は只見川を氾濫させ、只見線の多くの鉄橋を崩落させました。会津川口・只見駅間は特に被害が大きく、福島県金山町内5kmにわたり、今も不通で、この間は代替バスを走らせています。そんな金山町の応援も続けたいと思っています。

夏季会員交流会のご案内

恒例の夏季会員交流会を7月に開催します。今回は鶴岡ふるさと観光大使で羽黒流修験道山伏の大泉正氏に修験道についてミニ講演と法螺貝の音色を披露していただきます。暑気払いを兼ねて、楽しく有意義な情報交流の場になりますよう、皆様の日頃の活動のご紹介やふるさとのアピールをしていただければ幸いです。会員以外の方もお誘いの上、是非ご参加をお願いします。

1. 日 時: 2018年7月20日(金) 午後6時～8時30分
2. 場 所: 「KKRホテル東京」11階 丹頂の間
◇東京都千代田区大手町1-4-1 TEL 03-3287-2921
◇地下鉄東西線「竹橋駅前」の3b出口直結、千代田線大手町駅c2出口
3. 講 話: 「修験道について」
羽黒流古修験道山伏 大泉 成範(本名・大泉正)
(鶴岡ふるさと観光大使、FP事務所・オフィス勝どき代表)
4. 会 費: 6000円
5. 申込締切: 7月14日(火)
6. 飲 み 物: 地酒・ワイン・焼酎などの持込を歓迎します

歓迎！ 新しい会員のご紹介

2018年1月～4月入会(敬称略)

<個人会員>

桜井 けい(酒田北前大使)
根本 二郎(金山町観光大使)
前野 博紀(若狭おばま御食国大使)

【鴨川キヨ氏紹介】
【浅田和幸氏紹介】
【山下晋彦氏紹介】

お知らせ

山形県のもがみ北部商工会が東京・新宿で運営していたアンテナショップ「山形もがみ」が3月末で閉店しました。同店は、当会会員でさけがわ観光大使の新田隆範氏が運営に協力、最上地域の物産品販売と郷土料理の店として2016年9月にオープンしましたが、特産品の販売が不調なため、商工会が撤退を決めたとのこと。

全国ふるさと大使連絡会議の概要

(2018年3月末現在)

- 設立年月 1996年8月8日
- 目 的 各地において制度化され、委嘱されている「ふるさと大使」および「委嘱者」相互の情報交換・交流・連携を図り、全国のふるさと・地域の活性化に貢献することを目的とし、その達成のために各種の事業を行うものとする
- 会員の資格
 - ①ふるさと大使
 - ②ふるさと大使委嘱団体関係者
 - ③ふるさとを愛する人々等
- 会 費 所定の会費(3,000円以上、団体会員は10,000円)もしくは相応の貢献寄与をしなければならない

2018年3月末現在の会員構成

大使会員	105名
団体会員	21団体
一般会員	141名
合 計	267名

確認された大使制度

(2017年9月末現在)

県知事が委嘱	44団体	88制度
市長村長が委嘱	581団体	670制度
諸団体等の長が委嘱	141団体	145制度
合 計	766団体	903制度

2018年度年会費納入のお願い

年会費は個人会員3,000円以上(3,000円以上大歓迎)、特別会員5,000円、団体会員は10,000円です。2018年度年会費の納入をよろしくお願いいたします。

*郵便振替

加入者名一全国ふるさと大使連絡会議 口座番号: 00190-7-149658

*郵便振込

店名一038 普通7211051 口座名: 全国ふるさと大使連絡会議

*銀行振込

三菱東京UFJ銀行 亀戸支店 普通0173146 口座名: 全国ふるさと大使連絡会議

編集後記 東日本大震災7年に当たって、岩手県釜石市で被災された伊藤彰氏に当時の様子を振り返ってご寄稿いただきました。その後も熊本の地震など、自然災害が続いています。当事者でない者は時を経るにつれ記憶が薄れてしまいがちですが、いまだに避難生活を続けておられる人たちが山ほどいることを忘れてはいけなと戒めています。

今回は、函館市と北九州市の「郷里応援団」のイベントの様態をリポートしていただきました。こうした各地のふるさと大使や出身者の集まりは数多く行われています。かわら版では、各地の郷土の匂いが漂う情報をお届けしたいと思います。ぜひ、その様態をご紹介ください。当会の会員はふるさとを誇りに思い、その良さを自慢し、PRする役割を担っています。ご当地のお薦めや各種イベントのPRも是非お願いします。

活動報告でご紹介した「情報交流・研究会」について記事の中で書きそびれましたが、今年度は6月、9月、12月、3月の上旬を目安に開催する方針です。テーマは自由ですので、こんなことを話したい、紹介したい、という方はお気軽にお声掛け下さい。

ふるさと大使かわら版 2018年5月15日ー平成30年春季号ー (通巻87号)

◇発行: 全国ふるさと大使連絡会議(代表=浅田和幸)

◇編集責任者: 浅田 和幸 編集担当: 山下 晋彦

◇事務局: 〒103-0015 東京都中央区日本橋箱崎町36番3号N806

全国ふるさと大使連絡会議

TEL: 080-5002-6432 FAX: 03-5640-1433

Email: info@furusatotaishi.com